

---

# 最初で最後の一人

ぽりぽり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最初で最後の一人

### 【Nコード】

N5864U

### 【作者名】

ぼりぼり

### 【あらすじ】

突如光の塊が襲い掛かる。なすすべもなくその光に消えていく人々。すべての人が消えたかと思いや、一人生き残った人物がいた、その者の不思議な物語。

## 最初で最後の一人

如雨露から水が垂れ落ちる。公にさらされた太陽の光。その光が如雨露の水で虹を描いたとき、光の扉が現れた。

時は今からはるか昔の出来事。太陽と月の間に広がる空間。そこに繋がると言われている光の塊。それは木々や動物、人までも吸い込むことがある。当然吸い込んだのちには帰ってきた者はいない。人々はそれを恐れるようになった。あるものは地に隠れ家を作り、またあるものは勇敢にその光に立ち向かおうと、いつまでも光の前に佇む。だがそのものもあっけなく吸い込まれた。幾年かの時が過ぎる。そして光の塊が徐々に徐々に大きく、広がっていく。

逃げ回る者は既いない。つまり、皆が絶望しているのだ。

ふと気が付くとその星には人と呼べる生物がたった十数人だけになっていた。そして光がその集団に近づき他のものとは離れたところにいた男を残し、すべての生き物を吸い込んだ。男は何も抵抗せず、ただ立っていただけだった。

最後の一人だけになったのがわかると、光の中から声が聞こえた。

「最後の一人、それを味わうとどう思うか。」男は口を一向に開かない。光からは続けない。

「何も言うことがないというのならそれでいい。何もなくなって話すことすらできないのなら、お前も消滅させてやる。」

男は

「あ・・・ああ・・・」

小さくそれだけ唸ると、膝から崩れ落ちるように倒れた。

光はその男の頭に近づき、そして語る。

「正常なお前に戻してやろう。そして恐れるがいい。最後の一人を・・・」

男が目を覚ますと、そこは男の思っていた世界とは全く違う世界だ

った。見渡す限り周りには何もなく、ただあるのは石や土、泥で作った瓦など。他に生き物がいないような、絶望しか待っていない世界。男は座り込んだ。だが絶望の中、男はあることに気付いた。頭の中で疑問に思ったことがすべて、手に取るようにわかるのだ。何故こんな世界になってしまったのか。何故自分だけが残ったのか。そして男は悩んだ拳句に見つける。

『どうすれば他の人がいる前の世界に戻れるのか』  
それはすぐに浮かんだ。

男はそのあいまいな頭の中からでてきた答えに沿って、石を使い、地面に模様を描いた。それは恐ろしさと悲しみの詰まった絵だった。それが完成すると男はブツブツ小さく何かを言う。  
その直後に、すべてを光が呑み込んだ。

如雨露の水でできた虹。そこに現れた光からは男が出てきた。  
まるで這うように、何か恐ろしいものから逃げるように。

そして人々は気付く。その光の存在と男の存在に。男の容姿はまるでどこかの貴族のような、きちんとした格好をしていた。それ故に人々は何か、おびえるような眼差しで男を見る。そして口々に言った。

「へ、変態だ・・・」  
と。

## もう一つの世界

男は人々に避けられ、途方に暮れていた。町のはずれの林の中に小さな小屋があった。せめて風よけになるところでもとその小屋に入る。だが、そこにあったのは、布団や毛布などの幾らかの家具。男は良心からその場を離れようとした。だが、すぐにはできなかった。その貴族が着るような可笑しな服の端が引っ張られるのだ。

「・・・ついに家具からも嫌われたか。」

男は絶望感に浸った。

ふいに疲れが襲ってきた。目の前が暗くなる。そして男は眠った。だが・・・

「おい、起きろ！」

途端に起こされた。顔は暗くてよく見えない。だが確かに殺気のないようなものが感じられる。「おい、俺の聖地を荒らす奴！そこから離れろ！」

聖地とは一体何の事か。首を傾げると。

「その布団から離れると言っているんだ。」

まともに理解できる回答が来た。まあ理解すると、不審者だよな、俺。男の声がまたもや

「ここは俺が最初に見つけた場所だ。出て行くがよい。」

オマイは子供かつ！心の中で突っ込む。さらに

「俺の領域>テリトリー<に入りし者即刻出て行くがよい。」

また訳の分からないことを言い出した。

「おい、お前は何なんだ？」

これだけは何故か男には解らなかった。

「やはり、予言は当たったと言っのか・・・」

「は？予言？」

咄嗟にそんな反応をしてしまった。

「あっ・・・」

だが声の主はそれを待っていたかの如く、

「そう。全て予言なのだ！貴様が来ることだってわかっておったぞ！」

どうやら予言予言と言っているならそれでいい。だが続けて、

「貴様。光は見たか？」

は？

何の事だ？

「光を見たはずだ。このせかいに来る前に。」

確かに光の塊は知っている。だがこの世界とは一体・・・

「この世界とはどういう事だ？」

男は自分の分からない事だったので気になった。だが声の主は答えがない。それどころか何やらごそごそし始めた。

「こいつを・・・」

と言つて赤い紙を、それも古く黄ばみがかつた紙を取り出して、

「これを渡すことが俺の使命。」

それだけ言つて紙が渡された。直後にその者は姿をくらました。最初から居なかつたかの如く・・・。

だが、それを知る希望がある。奴が渡した赤い紙。そこには書いてあった。ここが本当の世界で、己のいた世界がこちらにいる人間の創作物だったと・・・。男は絶望した・・・。今まで生きてきた人生が人間の創作物であったことに。そして世界が破壊される間ずっと絶望していた男な追い討ちをかけられた為に、三日三晩泣きつづけた。

泣き続けても仲間が戻る訳はないが、何とかしてその方法を探さねばと、男は立ち上がった。

## 科学都市

沈んだ日がまた顔をのぞかせる朝。男はその日が登りきった昼に小屋を後にした。街までどれくらいかかるのか。それはもう覚えてはいない。そして、注目の的にならないように服装を小屋にあったものに、名前もブライアと改めた。男が街に着くと日が傾き始めていた。そして周囲を見渡す。そこには銀色の球体が宙にあり、そこを經由するかの如く大量の金属線で入り乱れていた。その先に見えるものは電光掲示板やワイドスクリーンの大型テレビなど、何れも文明の発達を意味する物だった。その時、球体のジオラマがスクリーンに映し出された。

一人の男性がそれを見上げ、

「可哀相に……」

それを聞いた彼は咄嗟に尋ねた。

「何が可哀相なのですか？」

その答えを聞いた事で彼の人生が大きく変わるとはその時は知るよしもなかった。

男性はこう言った。

「聞こえてしまったのですか。実はこのジオラマの中に生命があったのです。もともとは世界の逃げ道として開発中だったもう一つの世界、空白の世界。<sup>ブランク・ワールド</sup>完成後間もなく問題が発生しました。何も生物がないと世界が巡回しなくなる……。」

ここで男は言葉を止め、周りを見回す。それにつられてブライアも見た。周囲には黒いスーツに身を包んだ人が数人こちらに向かって来ている。

「……まずい。すみません。逃げて捕まらないで下さい。また会いましょう。」

そう言つて男は踵を帰すと、  
パッシューン！

と小さな爆発音と共に姿を消した。

それに気づいた黒スーツ達は後ろにいる白いシルクハットをかぶった男に

「目標を見失いました。」

そろった声で伝えると、

「ふむ……。では、そこにいる男を捕まえる。何か知っているはずだ。」

ブライアを指でさしながら黒スーツ達に命令すると、

「イエッサー！」

気持ち悪いくらいにそろった声で敬礼した。

危機が迫っている。感覚がものをいう。捕まるか逃げるか、逃走経路は一つ、男がいた方向だけ。だがブライアは逃げなかった。ただ立っていた。

希望のない世界で何も出来ない無力な人間の悪あがきもなく、黒スーツ達に囲まれた。そして、後頭部に衝撃があるとともに視界が狭まり、何も解らなくなった。

広い草原の中、太陽の光に目を眩ます。

そこは深い悲しみから掛け離れた活気がある。植物は皆青々と茂り、輝く雫を葉に持った大木、野を駆け回る野兎達が近寄って来た。そして、遠くに見える小屋へと向かうように走り去って行く。その先には人影が、小屋から出て来ると共に何かを持っている。それを振り上げたかと思うと、刹那に黒い噴水がいくつも上がりすぐに消えていく。そして暫く見ていると、身体が動かないではないか。前からはさっきの影が迫っている。

「う……。ぐ……。」

動けない身体では抵抗など到底出来ない。無力、無念という意志の塊が彼に襲い掛かった時、既に彼身体は斬られていた。

斬られた身体を目の当たりにして、彼は不思議に思った。

（何故意識があるんだ？）



声は出ない。考える事は出来る。だがこれが何なのか、わからない。夢心地の中、ふと、気がついた。

（夢？ そうだ。これは夢だ。）

刹那に景色が変わっていく。そこは前にも見た街の一角で、見覚えのある男が隣にいた。それは黒いスーツに身を包んでいた。

「夢の中から抜け出すとは・・・だが記憶は少し消せたはず・・・」

「

小さくそう言うと、男は瞬く間に消えてしまった。あたかも始めから居なかったかのよう。360度周囲を見渡すと一人の男が路地から現れた。

以前に会ったことがあるようなどこか懐かしい表情をして、寄って歩いてきた。そして彼は尋ねた。

「君は、元の世界に戻りたいんだね。」

そういつて、一つのガラス球を取り出した。

その中には、一点の光が神々しく光っている。

「その中に人々の記憶、生命データ、世界の情報が詰まっている。」

「？」

息をのむ。それに男は続ける。

「これはバックアップだ。元データはすべてこの都市のどこかに眠っているはず。あなたがこの世界の住人でないことはわかっています。だからこそしてもらいたいことがある。あなたが記憶を少し失っている間、この話は無意味でしょうけど、思い出したらすぐに行動してください。暗くなったら都市の入り口で待っています。」

気が付くと、ブライアの目の前には何もなかった。そして、足の向くままに来た道に戻っていった。

小屋に戻ったブライアはどうやって小屋に来たのか、思い出せなかった。しかし、赤い紙を視界に入れた途端、全てを思い出す。

「ああ。そうだった。この世界に来てしまった俺は、皆が生きている世界を取り戻さねば。」

もう一度心に刻み、夜を待つ。

辺りのものが見えなくなり、月明かりだけがその小屋を照らす。  
その時を待ち続けたブライアという異世界の青年。今、自分の仲間  
を救いに一步を踏み出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5864u/>

---

最初で最後の一人

2011年10月9日00時12分発行